

大学教育と現代社会における人文科学の役割

高田修平★

The Role of Humanities in College Education and in Contemporary Society

by

Shuhei TAKADA

(Received: October 31, 2017)

Abstract

According to some dictionaries, human science is defined as the science of human culture. Our cultural activity actually ranges broadly from personal to social ones, and it is difficult to draw a clear line between the two categories. That is why human science and social science cannot be clearly separated from each other. But human science is also called “humanities” and I think there is enough reason for it to be given this name. In the case of human science, human beings are treated as the object of study just like the ones in social science and natural science. But its another name, humanities, makes us feel that we are looking at ourselves more closely without any distance between us as researchers and us as the object of study. The emphasis is placed here not on systematic analysis but on a close observation of human beings faced directly with basic issues of life such as love, human ties, adversity, disease, conflict and death. Humanities as explained here may be exemplified, for example, by literature. Unfortunately literature, a symbol of old academism, is not a preferable subject of college education because much more weight is given now to practical education in college. But what is lacking especially among college students is the opportunity to give a deeper thought to human life as we experience while reading literature. I consider in this essay how humanities can contribute to college education and to contemporary society as a whole.

1. はじめに

人文科学を辞書で調べると、人間の文化に関する学問という定義が載っていますが、人間の文化活動は個人的なものから社会的なものへと幅があり、その区別は相対的なものです。人文科学、社会科学、自然科学の中で、人文科学と社会科学の境界線があいまいとなる所以です。しかし社会科学と自然科学の英訳がそれぞれ *social science* と *natural science* であるのに対して、人文科学の英訳は *human science* と *humanities* があり、他の二つの分野に比べてその解釈には幅があると思います。人文科学の二つの英訳は、それぞれ人間を対象化して科学的に解明する態度と、人間としての私たち自身の生き方を近くから観察する態度を示していると思います。私が長くアメリカ文学の研究に関わってきた経緯で個人的な思い入れもあるかもしれませんが、*humanities* に込められた人文科学の意味を深く考察す

ることによって、大学の教養科目における人文科学の役割、さらに現代社会が抱える諸問題に対応するために人文科学に課せられた使命を、より明確にできるのではないかと私は考えます。

2. 教養科目の役割

大学に課せられた社会的使命は、時代とともに変化します。私が大学に入った 1970 年代は、すでに顕在化した大学の大衆化にまだ大学のカリキュラムが対応しきれていない状況で、大多数の学生が十分に消化できない科目が機械的に並べられていました。彼らが単位を履修して卒業することは可能ですが、授業はあくまで、それを消化できる一部のエリート学生を対象に設定されていました。加熱した受験競争と大学がネームブランドに頼って学生を集められる社会的背景の中で、大学はそのような教養主義を維持することができました。

時代は変わって少子化の波が押し寄せ、多くの大学が生き残りを賭けて魅力あるカリキュラム作りに苦闘し

★ 経営学部経営学科特任教授

ています。もはや一部のエリート学生を対象とした教養主義の授業は許されず、一度入学した学生をすべて、いかにして4年間一人も残さず卒業まで導くことができるかが、大学の至上命題となっています。その中で、教養科目の位置づけは大きく変化しました。もはや大学で学ぶべき知識を得るために、教養科目を機械的に並べたような科目配置は許されません。専門科目との関連で、その存在理由と取捨選択の必要性が厳しく問われています。

今の大学が実用主義に傾斜しているのに対して、以前の大学は対極の教養主義に染まっていました。一例を挙げれば、私が入学した文学部はその多くが現在は「文化学部」に名称を変えて存続していますが、以前の大学の教養主義を端的に示している学部です。特に私が在籍した文学部は、実用主義とは程遠いアカデミックな授業が開講されていました。就職指導に類する授業はいっさいなく、卒業後の進路は学生が自分で決めることで、卒研ゼミはあくまで、卒業論文の指導に限定されていました。学科のカリキュラムに疑問を感じて、途中で退学する学生も当然多く、それは大学が関与する問題ではなかったのです。

時代の変化とともに、大学は学生の目線に沿って改革されてきました。学生による授業評価は、以前の大学では考えられない事ですが、学生の希望や学力を無視して自分勝手な授業をすれば、学生から低い評価を受けて教員は授業の改善を求められます。進路指導はアカデミックな卒研指導と同様に、卒業を間近に控えた学生の重要な指導の一つとなっています。大学教育の実用主義的な傾向は、そのような社会的背景の中で当然生まれてきた現象で、大学は学生の卒業後の進路に役立つ実用的な専門教育を重視し、それと関連の薄いアカデミックな教養教育を遠ざけてきました。

前述したように、アカデミズムを標榜した以前の大学の教養主義は多くの問題を抱えていました。学生目線による大学改革で、今の大学教育は学生から見てより身近でわかりやすいものに変化したと思います。しかし大学の「専門学校化」に歯止めをかけて、大学らしい教育を維持するためには、アカデミズムの本質的な要素はカリキュラムの中に残すべきであり、そのために教養科目が果たす役割を、きちんと検討すべきであると考えます。

3. 人文科学の意義

大衆化して、入学したすべての学生の目線に沿って運営されるべき今の大学は、アカデミズムの崇高な理念から遠ざかっていくように見えますが、大学を職業訓練ではなく自己形成の場として捉えれば、「授業のわかりや

すさ」とともに、「その広がり」と深さ」はやはり大学教育に欠かせない一要素と考えられます。

東海大学九州キャンパスは、社会科学系の一学部と自然科学系の二学部から構成されていますが、社会科学的思考や自然科学的思考に関する基本的なトレーニングがなければ、それぞれの学部で開講されている専門科目の理解は、表面的なものになってしまうでしょう。また設置された学部の種類にかかわらず、大学での人文科学的思考のトレーニングは、学生が卒業後に遭遇する様々な紆余曲折——人との出会いと別れ、仕事の挫折や転職など——の中で、必ず役に立つ人生の指針となるはずで

す。人文科学とは人間の文化活動を総称する言葉で、社会科学や自然科学と比べて定義がかなりあいまいです。他の二つが英語で *social science* や *natural science* と称されるのに対して、人文科学には *human science* の他に *humanities* という呼称があります。*human science* が人間を客体化して対象化する科学や技術を指すとすれば、*humanities* は、人間の文化活動自体をむしろ主観的に探究する領域を指しています。大まかに分類すれば、心理学や哲学が前者の領域、私が長年専攻した文学や芸術は後者に属すると思います。

人文科学は人間の文化活動を総称すると述べましたが、それは当然人間の社会的文化活動を包含するので、人間を客体化して対象化する学問は、人文科学と社会科学の二つの特性を有することになります。個人的な思い入れがあるかもしれませんが、その意味で真に人文科学的な研究は、*humanity* が *science* ではない領域、すなわち人間活動の所産を主観的に探究する文学や芸術の研究ではないか、そこに人文科学本来の醍醐味があるのではないか、と私は思います。

大学の実用主義化の中で文学部の多くは姿を消して、文化学部と改称されて存続しています。前述したように、文学部は以前の大学の教養主義を端的に象徴するような学部ですから、文学部の衰退は大学のアカデミズムの衰退、さらに人間の活動を研究対象として客観的に扱うだけではなく、その所産に身近に触れて主観的に探究しようとする *humanities* としての人文科学の衰退を意味すると思います。以前の大学では、それは文学部の授業だけではなく、教養の語学でも教材に文学作品を使うことで実践されていました。工学部や法学部の英語の授業でシェイクスピアを読むのは、今の大学のカリキュラムでは想像することもできませんが、以前の大学生は自分の専門にかかわらず文学作品に広く接していたので、それほど違和感を持たなかったと思います。

大学の英語教材から文学作品が姿を消したのは、コミ

コミュニケーション重視の英語教育、すなわち「大学らしい英語」よりも実用的な英語の授業をめざすという、大学の教養主義から実用主義への転換を反映しています。それを端的に示しているのが、TOEIC TEST の隆盛です。TOEIC TEST のリーディング・セクションを見ると、ビジネスレター、宣伝のちらし、イベントの案内など、日常生活の一端を切り取ったような題材が使われて、日常生活での英語の運用力が試されていますが、大学の英語教材も同様の趣旨で編集されています。

以前の大学では、語学教育はアカデミズムの影に隠れていました。英文科や仏文科の学生は、大学で文学の授業を受けながら、語学力を補うために語学の専門学校へ通っていました。実用的な語学教育が、現在は大学の英語教育の主流となっています。グローバル化が進行する現代社会のニーズを考えれば、学生の語学力を鍛えることは、大学の重要な社会的使命であると思います。しかし大学の語学教育から文学教育が姿を消して、人文科学的思考力をトレーニングする場を失ってしまったことを、やはりどこかで補わなければならないと私は考えます。

大学の英語リーディング教材や TOEIC TEST が目指しているのは、適格で迅速な情報の処理能力です。TOEIC のリスニング・セクションも同様ですが、きわめて日常的な内容を読み聞きとれば、4つの選択肢から明確な正解が選べるように意図されています。もし仮に文学的な英語教材がそこで使用されていれば、読み手に応じて多様な解釈が可能なので、実用的な英語力を判定するテストには向いていません。ここに実用的な英語教育と文学的な英語教育の根本的な違いがあります。前者が求めるのは教材の的確な理解であり、後者が求めるのは教材の深みです。前者は読み手の迅速な判断力を要求し、後者は読み手の深い思考力を要求します。

授業で扱う題材も、両者の間で大きく異なります。実用的な英語教育では、主に日常的な題材を扱い、たとえばビジネスや毎日の生活で出会う頻度の高い英語表現の読み聞きを練習することが中心となります。逆に文学的な英語教育が主に取り上げる題材は人生の非日常的な場面です。実用的な英語教育の目的は、ある特定の集団に入って一人前の仕事ができること、たとえば外資系の会社で人並みに英語を使えるようになること、すなわちある種の社会参加ですが、文学的英語教育の題材は、社会からの逸脱という正反対のベクトルです。たとえば不慮の事故や仕事の挫折、家庭の崩壊や近親者との死別などを通して、人間は非日常的な人生を体験します。それは慣れ親しんだ日常の社会的枠組みを離れて、ひとりで人生の新たな側面と向き合う瞬間です。文学の使命

とは非日常的な生活の場面を描いて、読者に人生の深い意味を考えさせることであり、それが人文科学的思考のトレーニングにつながると私は考えます。

実用主義的傾向の強い現在の大学で、果たしてこのような文学的英語教育は可能なのでしょうか。その実践例として、私が昨年度の春学期、九州ルーテル学院大学で行った英語の授業を紹介します。対象は人文学部英語専攻の20名程度の小クラスで、様々な専門の学生を対象とした教養科目の授業ではありませんが、よりわかりやすい解説を加えることによって、教養科目として開講することは可能だと考えます。

九州ルーテル学院大学の人文学部英語専攻は、以前の文学部英米文学科とは異なり、開講されるのは主に実用的な英語の授業で、学生が文学の授業に親しんでいるわけではありません。したがって私が教材として選んだのは、*British and American Short Stories* (1990) という英米文学を紹介する代表的作家の「ミニ短編集」です。文学的英語教育の第一の目的は、学生と読書体験を共有することであると私は考えますが、一編が5～6ページ程度の短編集の利点は、1～2回の授業でひとつの小説を教室で読み切れることです。一人の学生が1～2ページずつ小説を読みながら、15週の授業で5編の作品を取り上げ、2回のレポート提出を課しました。

今の学生は文学作品を読み慣れていないので、まず短編小説について解説する必要があります。特に5ページ程度の小説は、すべての単語、すべてのセンテンスが無駄なくひとつの効果を出すために使われています。長編小説の場合は、比較的導入部の説明が長く、読者は小説の世界に入りやすいのですが、短編小説は急にある場面の描写が、ひとりの登場人物の視点から開始されることが多く、小説を数ページ読まないと、小説全体の輪郭が浮かんでできません。大学の授業用教材は、通常取り上げた小説に関する編者の細かな注釈がついているので、それを活用しながら小説の解説をする必要があります。

小説が読みづらいひとつの理由は、通常の実用的な英語とは異なる特殊な英語表現が使われているためです。しかし一見奇妙に見える特殊な表現は、その登場人物の視点やその場面を説明するために必要不可欠な要素です。たとえば私が授業で取り上げた短編集に、ウィリアム・サロイアンの短編集 *My Name Is Aram* (1940) の一遍 "One of Our Future Poets, You Might Say" が収められています。彼はアルメニア移民の子供で、おそらく彼の少年時代の体験が、この短編小説の題材となっています。アメリカは「移民の国」と言われますが、建国以来アメリカへ来た様々な人種民族が、諸手を挙げて歓迎されたわけではありません。以前は奴隷としてアフリ

カから連れて来られた黒人や、西部開拓の過程で迫害されたネイティブ・アメリカンだけではなく、ヨーロッパからアメリカへ渡った民族も例外なく、人種差別の洗礼を受けました。小説を読み進むと、それが小説のテーマであることがわかりますが、なぜ小説がやや反抗的な移民の子供の視点から、学校の健康診断の場面で始まるのか、彼の特異な物の見方を共有できなければ、小説を十分に理解できません。要するに小説を読むのは、単に英語の表現を理解するだけではなく、小説の主人公、あるいはその背後の隠れた作者との対話であり、小説で取り上げた社会の不条理を彼とともに考える作業です。それが人文科学的思考のトレーニングであると私は考えます。

4. ウィリアム・フォークナー（アメリカ文学の研究事例）

英語の授業で文学作品を取り上げることは、実用的な英語の授業とは異なるひとつの特徴を持っています。それは英語の小説を読みながら、その中で描かれたテーマに関して自分で思考するトレーニングを身につけることです。次にひとつのアメリカ小説の研究事例を紹介しながら、文学における人文学的思考の特徴を、さらに考察してみたいと思います。取り上げるのは、*British and American Short Stories* に収められたアーネスト・ヘミングウェイと同世代の作家、ウィリアム・フォークナーの小説です。20世紀前半はアメリカ小説の時代と呼ばれ、その時代にアメリカは世界に名を残す大作家を何人も輩出しました。彼らの小説はそれぞれ異なる特徴を持っていますが、フォークナーはアメリカ南部のミシシッピ州で生まれ、生涯の大部分をその地域で過ごし、アメリカ南部に深く根差した人種差別の問題を小説の中で描きました。

19世紀のアメリカは、イギリスから独立して間もない発展途上国で、南部の綿花栽培以外世界に誇れる産業がなかった時代です。綿花栽培は労働集約的な産業で多数の労働力を必要としたため、多数の黒人を奴隷として使用しました。奴隷制度は当時カリブ海沿岸の諸国で広く施行されていた制度で、特にアメリカだけに限定された問題ではありません。その奴隷制度の是非をめぐって南北戦争が戦われたと言われますが、実際は経済基盤の違いによる政治的な対立から、南部諸州がアメリカからの独立を宣言し、それを認めない北部とのあつれきが戦争の引き金となりました。戦争に敗れた南部は、リンカーン大統領が奴隷制度廃止の宣言を受け入れますが、人種差別はその後も長く、特に南部を中心にアメリカ社会の深刻な問題として残りました。

人種差別の問題は、様々なアメリカの作家によって取り上げられました。黒人作家は種差別の犠牲者としての体験から生まれた様々な思い——悲哀、諦念、怒り、反抗心など——を、小説の中で描きました。より複雑な立場に置かれたのは、南部の白人作家です。アメリカの南部社会は綿花のプランテーションの所有者を中心とした貴族的な社会で、大家族が黒人の使用人を含めて穏やかに暮らしていました。フォークナーの小説は、彼の体験に基づいたそのような情景がよく描かれています。南部の黒人は白人に庇護されて平和に暮らしていたという彼の指摘は、黒人の社会的自立を阻むレイシストの発想として、一部の批評家から非難されたこともあります。もっともフォークナーがアメリカの人種差別に無頓着であったわけではなく、アメリカ社会の人種差別とは、黒人の血が一滴でも流れている、あるいは流れていると想定される者に対する差別意識を指しますが、その問題は彼の小説の随所にあふれています。南部の黒人は白人の庇護の対象であると同時に差別の対象であるという彼の黒人観には、あきらかに矛盾があります。黒人に対する人種差別とともに、フォークナーが小説の中で描いたもう一つの主要なテーマは、没落した南部社会に対する郷愁であり、その二つのテーマの間に彼の意識の矛盾が反映されていると思われます。

フォークナーは60余年の生涯のほとんどを生まれ故郷のミシシッピ州オックスフォードで過ごし、ヨクナパトーファ郡という架空の名前を付けて、その地域を舞台にした小説を書き続けました。彼は連作という手法をよく用いて、前の小説で描かれた登場人物を後の小説に再登場させて、小説と小説の間に連続性を持たせ、彼の描いた小説全体がひとつの小宇宙を表すことを意図しました。その小宇宙の中心に位置するのは、南部の没落を象徴するコンプソン家の運命を描いた *The Sound and the Fury* (1929) と、その連作で南北戦争当時の南部のある一家の栄華盛衰をコンプソン家の長男クエンティンの視点から描いた *Absalom, Absalom!* (1936) です。前者はフォークナーを小説家として一躍有名にした作品、後者は多くの批評家によって彼の代表作と目されている作品です。この二作品は、意識の流れという当時の実験的手法やピリオドのない膨大なセンテンスを駆使した、彼のもっとも難解な小説として知られています。後述するように、フォークナーは人間の心の闇を照らし出すために、そのような手法を用いたと思われますが、まず彼の作品の中でも比較的読みやすい *Light in August* (1932) を取り上げて、前述した小説のテーマがどのように扱われているのかを考察します。

Light in August は、主要な登場人物の再登場という

連作の形式を用いないひとつの独立した作品で、文章も比較的難解ではないので、フォークナーの小説の紹介として適切な作品であると思われます。「八月の光」とは、小説の舞台となるアメリカ南部の田舎町の牧歌的な情景を指していると思われますが、その一見のどかな場所で殺人事件が発生します。この場合の事件とは、まず町はずれの教会から火の手が上がり、それが東部から来た牧師の教会であり、現場から牧師の一人娘の他殺体が発見され、それが最近やって来た不審なよそ者ジョー・クリスマスの犯行であることがわかります。作者はまず町の住人の視点から事件を語り、次にジョー・クリスマスや牧師の娘ジョアンナ・バーデンの内面から、彼らの過去から事件に至る人生の経緯を描き、黒人の差別がアメリカ南部の住民——差別する側とされる側の双方——の生き方に深い影を落としていることを明らかにします。

小説の技法でまず注目されるのは、視点を途中で変える効果です。ジョー・クリスマスやジョアンナ・バーデンは町の住民と交流がないため、それぞれ「不審なよそ者」「変わり者」というレッテルを貼られます。しかし小説の後半で彼らの内面が語られて、差別する側とされる側に分かれながら、いずれも人種差別によって歪んだ人生を強いられたことがわかります。ジョー・クリスマスは黒人の血を引くと噂されるメキシコ系の男の子供として生まれ、自分の出自に悩みながら少年時代を過ごし、初恋の相手にさえ「黒人の血」を打ち明けたとたんに蔑視されてショックを受け、アメリカ全土を放浪します。彼が放浪の後で出会ったジョアンナは、東部から来た牧師の娘で、彼に差別意識を持たない唯一の町の住民です。しかし南部の過酷な伝道活動の中で、結婚もできず黒人の差別者として「原罪」意識を植え付けられ、逆の意味でジョー・クリスマスを特別視します。ジョアンナにとって、ジョー・クリスマスは女らしい生き方を奪い、罪の意識を押し付けた「黒人」のひとり、彼と夜密かに性的に交わることで、冒とくに満ちた欲望を発散します。他の南部の住民と同様に、彼女はありのままのジョー・クリスマスを直視できず、一方的に伝道の仕事を押し付けられたジョー・クリスマスは、それを逃れるために彼女を殺害します。

フォークナーが題材としたのはアメリカ南部で普通に起こる事件ではないが、ジョー・クリスマスやジョアンナ・バーデンのような過去を持つ二人の人間が出会えば当然起こり得る事件です。その事件の特異性は、南部社会の抱える問題の特異性につながり、それをクローズアップすることになります。彼の小説はその問題の解決策は提示していません。彼の意図はむしろ、それをある

がままに見つめることです。文学の究極的な役割は、小説で取り上げた問題の処方箋を考えること、すなわち *human science* の役割ではありません。むしろ矛盾に満ちた人間の行動をあるがままに見てその問題点をクローズアップすること、すなわち *humanities* の一分野としての役割が、文学のあるべき姿であると思います。

20 世紀の小説には、心理学から借用した意識の流れという手法を用いる作家が生まれましたが、それは古典的小説の筋、性格、時間の枠組みを超えて、絶えず揺れ動く人間の心を表現することを可能にしました。意識の流れは、内的独白という句読点のない長いセンテンスとともに、フォークナーが *The Sound and the Fury* とその続編 *Absalom, Absalom!* の中で用いた技法で、小説の主人公クエンティン・コンプソンの内面を通して、南部白人の苦悩を描くために活用しています。*The Sound and the Fury* は4つのセクションに分かれ、南部の名門コンプソン家の栄華盛衰を、それぞれ3人の息子と黒人の召使の老婆の視点から描いていますが、コンプソン家の没落と愛する妹の墮落に傷心して入水自殺をする長男クエンティンは、登場人物の中で作者フォークナーの内面を最も反映していると思われます。

クエンティン・セクションは彼が自殺する人生最期の一日を描いていますが、コンプソン家の没落を意味する南部の歴史の展開が彼の絶望の原因であり、その象徴的存在である時間の経過から逃れるために、時を刻み続ける自分の時計を壊して時間がない永遠＝死の世界を選択します。彼の人生最期の一日は、壊した時計を再度時計屋へ持参し、妹の純潔を守る試みの挫折を繰り返し回想するなど、彼の激しい心の揺れを示しています。クエンティンの自殺は、絶望的な状況を克服できずに死を選ぶ人生の敗北者の側面と、絶望的な人生を受け入れて生きる彼の父のニヒリズムを拒み、あくまで理想主義に固執する人間に残された唯一の選択肢をも意味します。自殺の両義的な意味をめぐって、理想の追求とその挫折の間を行き来するクエンティンの心の軌跡を、意識の流れの技法を用いて克明に描写することが、この小説の核心的な部分であると思います。

The Sound and the Fury で自殺したクエンティンを、サトペン家の物語の語り手として再登場させたのが、フォークナーの最高傑作とされる *Absalom, Absalom!* です。サトペン家はコンプソン家と同様、南部の没落とともに衰退した一族で、中でもサトペン家の長男ヘンリーはクエンティンと同様の問題を抱え、サトペン家の物語の唯一の生き残りであるローザという老婆の話を聞いていたクエンティンは彼女の話に引き込まれて、ヘンリ

一と一体化したクエンティンは*Absalom, Absalom!*を彼自身の物語に変貌させます。すなわち、ヘンリーの妹の婚約者となるチャールズ・ボンが彼が敬愛する男であると同時に自分の腹違いの兄であり、二人の結婚が近親相姦になることが判明します。彼を悩ますもう一つの事実は、自分の母に黒人の血が流れていることが分かって母と自分を捨てた父親のトマス・サトペンに対して、自分を認めさせるためにチャールズ・ボンはサトペン家に接近したことです。近親相姦のテーマは、*The Sound and the Fury*のクエンティン・セクションで、妹の純潔を守るために自分が彼女の相手に置き換わるという想念に繰り返し現れますが、妹の純潔を汚す男が腹違いの兄であると同時に黒人の血が流れていることは、二人の結婚を認めることは自分の血筋に黒人の血が混ざることを容認することを意味します。ヘンリーはチャールズ・ボンといっしょに南軍の兵士として南北戦争に従軍し、荒廃した南部の戦場でヘンリーはチャールズ・ボンに婚約の破棄を迫り、それを受け入れない彼を拳銃で射殺します。

フォークナーの内面を反映した登場人物クエンティン・コンプソンは*The Sound and the Fury*で自殺しますが、彼を語り手として*Absalom, Absalom!*に再登場させて、コンプソン家と同じくサトペン家という南部の名門家庭の栄華盛衰を小説のテーマとして、クエンティンと同じ悩みを抱えたヘンリー・サトペンの心に感情移入しながら、クエンティンとヘンリーの語り手＝登場人物としての内面が展開されます。サトペン家の物語も*Light in August*のジョー・クリスマスの物語と同様、アメリカの南部社会で当然起こり得る事件ですが、*Light in August*が社会の周辺に生きる人物に焦点を当てた野に対して、ヘンリー・サトペンは南部の名門家庭に生まれ、彼に感情移入したクエンティンとともに、自らの血筋に黒人の血が混ざることを容認するか否かの選択を迫られます。相手が自分の敬愛する男であっても、それを防ぐために銃の引き金を引くのは、南北戦争当時の南部社会ではフォークナーでもやむを得ない選択であったかもしれません。これは南部社会の白人が突き付けられた究極の選択であり、読者に人文的考察を迫る格好の小説であると思います。

5. 現代的な諸問題と人文科学

現代社会を取り巻く諸問題を考える時、書店の棚に並んだ新書のタイトルを概観すると、ある程度その傾向が見えてくると思います。新書が扱うのは、環境問題、医療福祉、子供の育児と教育、社会のグローバル化とデジタル化、格差社会、多文化と多言語、歴史問題、生き甲

斐の探究など、人文、社会、自然科学の様々な領域に及びますが、その中で多少恣意的ですが最も私の興味を惹いた次の三冊の書物を取り上げて、現代社会における人文科学の役割を考えてみたいと思います。

『ウェブ恋愛』 渋井哲也 （ちくま新書 2006年）

インターネットを通じて知り合い、恋愛関係に至るウェブ恋愛は、ウェブ社会の到来による今までと異なるコミュニケーションを反映しています。コミュニケーションの道具としてのウェブは文字中心で、対面コミュニケーションで不可欠な表情、身振り、態度、匂いなどの要素に欠けています。具体性が欠けている分相手を理想化しやすく、ウェブで知り合ってから実際に会うことを想定せず、ウェブの中だけで愛し続ける恋愛、すなわち肉体的な接触がなくても成り立つ恋愛が本来の意味でのウェブ恋愛と定義できます。

筆者はさらに、今どきのコミュニケーションの一作法として、不特定の読者に読まれることを意識したウェブ日記を取り上げます。これはブログの普及によって急増した現象で、自分の恋愛を『2チャンネル』に書き込み、掲示板の常連たちのレスポンスに後押しされながら奮闘する『電車男』は、このような背景から生まれて流行したテレビドラマと言えます。ウェブ日記では夫婦生活の日常を扱ったブログも注目を集め、ウェブが恋愛や結婚/離婚の公表や相談の場所として機能していることが指摘されています。

筆者は最後にブログやSNSを通してウェブ恋愛に従事する人々の特徴を考察し、生きることへの「希薄さ」を感じる「生きづらさ系」の若者たちが多く、自信のなさや承認欲求から恋愛やセックスへの依存症が生まれると分析しています。さらに、生きづらさを抱えた人たちが、お互いの弱さに惹かれあう傾向があるとも指摘しています。それは相手の実像を認識した恋愛ではなく、チャットが作り上げたウェブ恋愛にすぎず、実際に会った時はお互いの理想的イメージが崩れる錯覚の要素を含んでいます。

筆者はウェブ恋愛に対して、必ずしも否定的な見方を持っているわけではありません。それは自分のウェブ恋愛の原体験がこの本を執筆した動機であるという、冒頭の指摘にも示されています。筆者はむしろそれをコミュニケーション手段の多様化から生まれた、必然的な現象と捉えています。出会い系サイトの問題に関しても、過度な法規制は健全なウェブ・コミュニケーションを妨げるので、規制の根拠となる実証的研究が必要であると説いています。しかし匿名の人間関係に癒しを求める筆者

の視点には、対面コミュニケーションに対する苦手意識が垣間見られ、筆者を含めてウェブ恋愛に従事する人たちの抱える問題点が浮かんできると思います。地域社会の絆が薄れ、現代人は多様な人間関係を持っているとしても、私は基本的な人間関係は一对一の対人コミュニケーションであり、ウェブはそれを広げるための道具であると思います。本来対人コミュニケーションから生まれる恋愛がウェブ恋愛に変わり、自分の心を内省すべき日記が他人の承認を得るためのウェブ日記に変質する時、私はそれに従事する人たちの心の危うさ、人間関係の危機を感じざるを得ません。彼らはもっと孤独な時間を持って、自分の心と向きあい、一人で考えて判断するための人文学的トレーニングが必要であると思います。

『日本の近現代史をどう見るか』 岩波新書編集部
(岩波新書 2010年)

日本の近現代史は、それが書かれる時点の関心が変化することによって、書き直しが繰り返されてきました。まず1945年の敗戦の意味を考える戦後歴史学によって、最初の日本の近現代史が編纂され、次に戦後歴史学の支配者の歴史に登場しない民衆の視点に基づいて、日本の近現代の民衆史研究が生まれ、1990年前後のグローバリゼーションと呼ばれる新たな変化に向き合った現代歴史学は、「日本」や「国民」という歴史的主体がすでに崩壊しつつあるという認識に基づいて、再度新たな書き直しを行っています。すなわち現代歴史学は、戦後歴史学や民衆史研究が自明のこととしてきた前提を問い直しています。

幕末と維新を経て日本は近代国家へ変貌しますが、この本はその時期の「日本人」と「国民」の形成過程に光を当てることによって、明治維新の文明開化が善で幕末期江戸が悪とみなす従来の歴史認識の誤謬を正します。まず幕末期において、近代化と自由貿易帝国主義を振りかざすアメリカに対して、江戸幕府の幕臣は巧みな外交交渉を通して日本の利害を守り、従来は汚点とみなされた領事裁判権は、外国商人の侵入を防いだ旅行権の制限とともに、まだ主権国家でない江戸幕府が外国と締結した最善の策であったことが明らかにされます。

明治時代に日本は急速に近代国家へと脱皮します。政府の専制と激しく対決した自由民権運動が、その後第二次大戦を経て現代に至るまで続く、近代の「自由主義」に対抗する「協同主義」の流れを形成する過程がこの本で分析されていますが、国内政治では民権と憲法を主張した民権派は、対外的には帝国主義的な領土の拡張に協力します。これは囲い込みと競争を追求する近代国家の

特質を考えれば、国家を主体的に担おうとした当時の民権運動が抱える両面性であるところの本は指摘します。民衆と民権運動は反政府の点で一致しましたが、当時の民衆は客分として政府に仁政を求め、まだ国民としての自覚は持っていません。やがて天皇を中心に中央集権国家を確立するため、地方巡業で天皇の近代国家の君主というイメージを広げ、日清・日露の戦争で国をあげての大事業に参加して、民衆は天皇陛下万歳を叫ぶ国民に変貌します。

大正時代は第一次大戦への参戦による経済成長で日本の社会が民主化すると同時に、植民地支配による帝国主義が確立した時期、すなわち批判意識と膨張意識の二重性を孕む時代でした。後世の歴史認識で大正デモクラシーと呼ばれる所以ですが、いつの時代も注意深く見ればこの二重性が存在し、それがこの本の基本的歴史認識となっています。たとえば第二次大戦中は、デモクラシーが目立った大正時代と対照的な帝国主義的国家総動員体制の時代ですが、医療福祉システムの整備などの協同主義的な要素も存在しました。その二重性を見落とすと、GHQの占領政策で日本のすべてが変わったという、無条件降伏後の占領サクセスストーリー（神話）が生まれることになります。同様に1950年代の協同主義的社会を看過すれば、高度経済成長期の資本のヘゲモニーによる協同主義と自由主義の接合が理解できず、日本の奇跡的経済成長神話という誤謬に捉われることになります。

この本では対象とする社会の機能や活動の連鎖関係を「システム」と呼び、その社会を社会として成り立たせている世界像や意味を「リアリティ」と呼んで区別していますが、社会のシステムを把握できなければ、その社会のリアリティも当然取り違えることになります。国民国家創成期の幕府政治の過小評価や戦時中の協同主義の見落としが、明治政府や占領政策の過大評価による神話を作り上げたのは、その一例です。しかしある社会の世界像を示すリアリティの背後には、常に歴史を編纂する人々の歴史認識があり、「日本」や「国民」という概念の崩壊を認識したことで、現代歴史学は日本の近現代史の従来の神話から脱皮できたと言えます。現代歴史学が無意識に内包する神話が、今後の歴史学によって指摘される日も来るでしょう。歴史は過去との繰り返される対話によって、成り立っています。

インターネットとデジタル技術の発達で、文献や映像などの歴史的資料が急速に膨らんでいます。しかし技術的革新が思想家や歴史家の仕事を不要にするわけではなく、コンピュータ科学者と人文学者の連携によって、歴史に対する深い考察の展開が個々の研究者に課せら

れていると、この本は最後に指摘しています。

『心にとどく英語』 マーク・ピーターセン (岩波新書 1999年)

筆者は日本に英語を教えに来た多くのアメリカ人の一人ですが、日本語の魅力に取りつかれて、間違った使い方で恥をかきながら苦労して日本語を習得しました。言葉の壁は文化の壁でもあり、その乗り越えがたい壁の高さを筆者は自分の経験から熟知し、それが英語の難しさを日本人に教えたいという、筆者の動機につながっています。今は実用英語全盛の時代で、「簡単に無理なく英語が上達する」という英語学習法のキャッチフレーズが目飛び込んできますが、逆に英語は難しいという視点から、映画のセリフなどの生きた英語を通して英語の味わいを教えることが、この本の魅力につながっていると思います。

筆者はまず対応関係の呪縛という視点で、冠詞や時制などの文法構造から語彙に至るまで、英語が日本語とまったく異なる発想と論理を持つことを示します。たとえば一見対応するように見えて部分的にしか意味が重なっていない言葉の例として、「チャレンジ」と *challenge* を取り上げます。「チャレンジ」はすでに「挑戦」と同じ意味で日本語として定着した言葉ですが、*The marathon challenges the runners* という英語を、私たちの使う「チャレンジ」という言葉の語感からどう解釈すればよいのでしょうか。日本の文化的背景で使われる「チャレンジ」は、*challenge* が本来持っていた意味範囲の広さを失ってしまったのです。

次に英語の時間感覚の重要性を説明するために、筆者は日本でもなじみ深い『卒業』や『カサブランカ』の名場面のセリフを引用します。ミセス・ロビンソンが主人公のベンを誘惑するために使う動詞の現在形 *drink*、レノー署長の女癖の悪さを示すために主人公のリックが使う動詞の現在完了形 *has kept* など。まさに言葉はそれが使われる文化的背景の中に置かれて、初めて本来の輝きを見せます。重要単語を一か所に集めて効率的に英語を教えるのではなく、時間をかけて一つ一つの言葉の味わいを読者に楽しませることが、筆者がこの本を書いた意図なのでしょう。

言葉の味わいは、筆者が使う日本語の文章にも見られます。たとえば *get caught* や *get soaked* が示す「迷惑の受け身」を説明するために、筆者は「日が記読まれた」を「日記を読まれた」に変えた時の「迷惑」のニュアンスで説明し、動詞の後の *on* や *away* の持つ「意図性」のニュアンスを、「壊した」と「取り壊した」の違い

や「やめた」と「取りやめた」の違いから説明します。本のまえがきによれば、筆者がこの本を日本語で書いたのは、日本語で考えると日本人の英語に対する苦手意識も認識できるからです。言葉の壁は文化の壁でもあり、異文化の理解の難しさに直面した時に初めて、その国の文化や言葉の核心的な部分が発見できるのでしょう。

6. あとがき

現代は社会のグローバル化やデジタル化の進行にともなって、私たちの生きる環境が急激に変化する時代です。そのような変化に対して、私たちは新たな対応を迫られています。たとえばウェブ社会の進行は、特に若い世代の人間関係に、大きな影響を与えています。しかしウェブ恋愛やウェブ日記をみると、それに関わる人たちの多くは、従来の対人関係に苦手意識をもって、ウェブの世界に逃避しているように思えます。きちんと人と交流して、人生の意味をじっくりと考える人文学的思考のトレーニングが足りなかったのではないかと思います。

またグローバル化の進行は「国家」や「民族」に関する従来の概念の変更を迫り、それが現代の歴史認識の再考につながっています。近現代史の新たなストーリーを書くことは、混迷する現代の状況や今後の展望に新たな視点を与えることにつながります。文献や映像の収集とともに、それを読み取る歴史家の確かな人文学的思考力が試されます。

グローバル化の進行で国境を超えた人や物の交流が盛んとなり、国際語としての英語のニーズはますます高まっています。それは多国籍企業や国際会議に象徴されるような、ボーダーレスで無国籍のエリアでのコミュニケーションに使われる英語です。しかし様々な国や民族の人が混ざりあうことによって、文化の違いによる対立や紛争が増えることも事実です。したがって、国際社会で使われる実用的な英語だけではなく、英語を母国語や公用語として使う国の人々を正しく理解するために、異文化の深い理解に根差した英語学習も必要です。

大学における人文科学の役割は、ますます大衆化と知識の専門化が進む現状の中で、以前の大学で求められた思考力のトレーニングを行うことであると思います。いろいろな方法が考えられると思いますが、私はその一例として、英語の短編小説を大学の教養の授業で読むことを提案しました。一つ一つの言葉の意味にこだわり、その小説の主題を考えることは、実用英語が全盛の時代に学生は新鮮な体験ができると思います。いずれにしても、グローバル化やデジタル化の波で社会が大きく変化し、変化のサイクルも年々早まっているようにみえます。急流の中に身を置いたような現代社会で、人文学的思考

と私が呼ぶものは、その流れに逆らう一本の杭のような気がします。私は必ずしも以前のアカデミズム全盛の時代を懐かしむわけではありませんが、人間として欠かせない思考力を身に着けて、急流のような現代社会に羽ばたく学生を育てる。それが現代の大学に課せられた使命ではないかと思います。

参考文献

横山幸三 編 *British and American Short Shorts* 成美堂 1990 年

William Saroyan *My Name Is Aram* Harcourt 1940

William Faulkner *Light in August* Random House 1932

William Faulkner *The Sound and the Fury* Random House 1929

William Faulkner *Absalom, Absalom!* Random House 1936

渋井哲也 『ウェブ恋愛』 筑摩書房 2006 年

岩波新書編集部 『日本の近現代史をどう見るか』 岩波書店 2010 年

マーク・ピーターセン 『心にとどく英語』 岩波書店 1999 年